クラスター理論による芸術概念の説明

巣守美羽
地域キュレーションコース
美学

今日私たちが出会う芸術作品は、あまりにも多様で、芸術とみなされることに困惑してしまうことすらある。全く似ていないものであっても同じように芸術作品と呼ばれることもあれば、人によって芸術作品とする対象が異なることもある。こうした状況の中で、芸術の定義や評価を行うことはますます困難になってきている。このような事態を適切に説明するためには「芸術」という言葉の使い方に着目し、芸術作品の説明が実際どのようになされているのかを分析することが重要である。そのために本稿では、ベリス・ゴートによるクラスター理論を取り上げ、特に彼の「束概念としての芸術」(2000)の内容を精査し分析する。さらにクラスター理論を擁護しつつ、「芸術」という言葉が、芸術作品の説明という性質を持つがゆえに、形容詞として働いていることを明らかにする。

ベリス・ゴート「束概念としての芸術」

ゴートのクラスター理論は、「芸術」という言葉と芸術である対象、その対象についての説明の三項関係を明らかにしようとする。ゴートによれば「芸術」という言葉の説明はいくつも並び立つ束(クラスター)のようにまとめられる。一本一本が芸術である対象の説明となっている説明の束は、対象が芸術であるために重要な性質を特徴的な基準として捉えるものである。

これまで美学は、芸術作品を観察し分析してきたが、ゴートはその中から選ばれて束ねられることになるような説明の候補を十挙げる。ただし芸術である対象は今後も変化、増加すると考えられるため、あくまで現時点で芸術である対象に関する十の説明であり、現在の「芸術」という言葉の使い方である。

1. 美しい、優美である、優雅であるといった確かな美的特徴を持っている
2. 強い感情を表現している
3. 知的な挑戦である(すなわち、一般に認められた見解や思考様式に疑問を呈すること)
4. 形式上複雑で、首尾一貫している
5. 複雑な意味を伝える能力を持つ
6. ある一つの視点を提示している
7. 創造的な想像力の実践である(独創的である)
8. 高度な技術の産物であるような人工物や、パフォーマンスである
9. 確立された芸術形式に含まれる(音楽、絵画、映画など)
10. 芸術作品を作ろうという意図の産物である

これら十の候補はある対象が芸術であるための基準であるが、全てが当てはまる必要はなく、そのうちのいくつか、少なくとも一つが当てはまればよい。また、芸術である対象である限り全てに当てはまるというような基準でもない。

とはいえ「芸術」の説明をより正確なものに近づけて実用的なものにするにあたり、ある程度の制約がないと適切でない説明も含まれてしまうことになる。ゴートは説明の妥当性を保証するためにさらに三つの制約を付加する。(1)あるものが芸術であるという直観に説明が合致すること(2)規範に合うこと。これは、あるものが芸術であるという直観と芸術という言葉の使い方の不一致を説明できる「誤りの理論」と、規範と直観の間を行き来して適切な判断へと向かう「反照的均衡」によって実現される。(3)発見的実用性を持つこと。つまり、基準によって個々の作品が芸術であるかどうかを推測し、判断することができる。

これらによって説明されるゴートのクラスター理論は、定義によらず、「芸術」という言葉の現在考えられる最も有効な説明として機能する。定義という、あらゆる芸術に共通する性質を探り当てようとするいわば無謀な企てとは異なり、クラスター理論は、私たちの芸術という言葉の実際の使用に即した理論として評価できる。

クラスター理論の展開と、「芸術」という言葉の使用

クラスター理論は、「芸術」という言葉を、芸術である対象の説明をすべて述べなくてもその対象を指示するのに代用できるような記号と捉え、基準となる性質によって芸術である対象の説明を行う。つまり、過去から現在までの芸術に対して束となった説明を提示することで、芸術という対象への語り、対象の価値、対象のあり方を示している。それゆえ私たちが「芸術」という言葉を対象の説明や対象の評価として使用している際の使い方と一致している。さらに私たちが「芸術」という言葉を使うとき、何か芸術の本質のようなものの存在について語っているのではなく、実際には「芸術である……」「芸術的な……」という形容詞として「芸術」という言葉を扱い、「芸術的な対象」がどんな性質を持つのかを明らかにしているのだと考えられる。これにより、ある人があるものを芸術と呼び、別のある人が同じそのものを芸術と呼ばないことや、私たちがなぜある程度一致して対象を評価し、会話を成り立たせることができるのかについても説明が可能になるはずである。

[引用文献、主要参考文献、URL]
参考1)Berys Gaut / "'Art' as a cluster concept," in Noël Carroll(ed.), *Theory of Art Today* / University of Wisconsin Press / 2000 / pp.25-44
参考2)Ludwig Wittgenstein/ *Philosophische Untersuchungen*/ Wiley-Blackwell/ 2009
参考3)ジョン・R・サール/『言語行為』(坂本百大、土屋俊訳)/勁草書房/ 1986

容姿の美醜観念を解くには

マーク・アグハールの作品から探る

松永瑠依
芸術文化キュレーションコース
ジェンダー美学

本稿は、美の多様化が謳われるようになった現在においてもなおステレオタイプな美の規範が未だ存在し、人々が容姿の美醜観念に囚われている現状を問題視し、そうした美醜観念を解くための手立てを探ろうとするものである。

そのためにまず、「外見」についての研究を重ねる社会学者・西倉実季による、フェミニズムにおける女性美・ルッキズム・容姿に関する個人的なナラティヴといった観点における論を参照し、容姿と社会との関わりについて整理し把握した。フェミニズムは男性中心的な社会構造の中で起こる性的差別や抑圧から女性を解放するための思想・運動であるが、そこで女性の美についても議論がなされてきた。西倉は美を男性支配による女性への抑圧の一要素とみなす社会決定論的な「抑圧としての美」とそれを通して女性性が構築される媒介として権力を理解する「規律実践的な美」の二つのパースペクティブに分けて論じ、両者に対し働き続けている社会／文化／制度である「美のシステム」の存在を明らかにしている。女性を抑圧する社会的な「美」の規範が、本来主体として美を実践するはずの女性に対し、依然として「呪縛」となって機能し続けている状況は、労働の現場におけるルッキズムの問題や、外見の美醜とそれにまつわるアイデンティティの問題に取り組んだ顔にあざのある女性のナラティヴ分析から明らかにされている。

容姿についてのこれらの考察を踏まえた上で、トランスジェンダーであり、クィアアーティストとしてオンライン上で活動したマーク・アグハールの作品から、アグハールの身体表象を分析している。ジェンダークィアに加え、有色人種、肥満体型など、自身のアイデンティティが、属した社会においてマイノリティとして扱われる中で、アグハールは芸術を通して、一貫してそれに抵抗する姿勢を見せている。アグハールが自らの身体を提示する作品では、加工や隠蔽を一切することなく、自らを装飾することでセルフケアとしての美を見出していることと、ジェンダー規範に従うことによる、身体の「男らしさ」「女らしさ」の概念に対する疑問を自らの身体によって投げかけていることが見て取れる。

つぎに、アグハールの身体への視点を契機として、ジェンダーの観点から身体への新たな視座を提示するために、ジュディス・バトラーのジェンダー論とゲイル・サラモンによるトランスジェンダーの身体についての議論を参照した。

バトラーは、様々なフェミニズムの理論に応答しながら、生物学的性（セックス）・社会的性（ジェンダー）の捉え直しを行いつつも、「女」とはなんであるのかという最終的な規定をせず、かといってカテゴリを打ち壊すこと・性差を無いものにもしない。子供を産む/産まない、男性の欲望の対象である/ない、あるいは人種や社会的階級、異性愛以外のセクシュアリティ、そして生物学的に雌とされる身体を持つ/持たない等、様々な差異があってもそのことはその人を「女ではない」と判断する根拠にはならない。バトラーはこうした意図で「女の身体」の答えを決定せず、開放したままにしている。

サラモンはトランスジェンダーの身体経験を参照しつつ、現象学や精神分析における身体性の理論を読み直すことで身体を分析し、「性別化された身体」が本質的・物質的なものではなく、 社会との関わりの中で構築されていく感覚であることを示している。 同時に、社会構築主義的身体と生きられた身体は両義的なものであり、対立するものではないと主張する。なぜなら「身体は社会的に構築されているということとその感じられ方は否定できないということとは同時に主張可能だからである」。バトラーとサラモンの二者の論は、ジェンダーと物質的な身体の揺らぎを示している。これらの視点は容姿の美醜からの解放のための有効な議論を導くことになる。

私が本稿をもって目指したところは、容姿にまつわる美を本質化しないこと、ともすれば抑圧として働く美の規範に対して、私たちが不必要な劣等意識に苛まれることなく生きられるようになることである。そのために社会構築的な容姿の美の存在を確認し、容姿や身体についての捉え方に新たな視座を持ち込んだ。私たちの容姿や身体は美醜で評価されるのではなく、ただ「ある」ように「ある」ことができるはずである。

[引用文献、主要参考文献、URL]
西倉実季／「『美』を論じるフェミニズムの課題　― 二元論的思考を超えて ―」／F-GENSジャーナル (4), pp.61-67／お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア／2005
西倉実季／『外見が能力となる社会　ルッキズムと倫理』／「現代思想」47(12),176-182／青土社／2019
西倉実季／「外見の美醜をめぐるアイデンティティの変容過程:顔にあざのある女性のナラティヴ分析」『年報社会学論集』(17) 72-83／関東社会学会／2004
ジュディス・バトラー、竹村和子（訳）／『ジェンダートラブル–フェミニズムとアイデンティティの攪乱』／青土社／1999
参考・引用）ゲイル・サラモン、藤高和輝（訳）／『身体を引き受ける』／以文社／2019／p123
参考）MarkAguhar／https://markaguhar.tumblr.com/

現代の芸術作品に対する理想の鑑賞態度の検討

吉村桃子
芸術文化キュレーションコース
美学

現代芸術の作品が、「不謹慎だ」、「配慮に欠ける」といった指摘を受けることは、今日では珍しいことではない。2019年に開催された「あいちトリエンナーレ2019」の一企画「表現の不自由展・その後」は、そうした批判が殺到したことでとりわけ大きな話題になった事例である。また、作品を制作・展示する側が、批判への応答として「表現の自由の侵害である」、「検閲行為である」と反論するケースも増えている。しかし、そうした言及全体において、作品の内容に関する指摘や議論はほとんどなされていない。作品の理解が得られていない状態で、作品についての正しい議論をすることは可能なのだろうか。本論で扱うのは、こうした現代芸術作品への批判やバッシングに表れているような、芸術を鑑賞する態度の問題である。

現代芸術は、その性質上極めて難解なものである。同時に現在では、芸術鑑賞における多様な受け取り方や自由な解釈も容認されている。しかしながら、難解だからといって鑑賞者が自分勝手に批判してよいわけではなく、どんな自由も全て許容されているというわけでもない。芸術鑑賞における多様な解釈を成立させるのは、作品の理解を経た鑑賞態度である。本論の目的は、この理解を伴った鑑賞態度、すなわち、現代の芸術を鑑賞するための理想の態度を明らかにすることにある。

まず、伝統的な芸術鑑賞における理想の態度として、デイヴィッド・ヒュームの「趣味の標準について」(1757年)の議論を分析していく。「趣味の標準について」でヒュームは、人々の抱く所感は多様なものであり、その感じ方には正誤を問う必要はないとした上で、「真の判断者」という存在を提示している。真の判断者とは、5つの条件を満たした、鑑賞における理想の状態にある存在である。この条件とは、①繊細さ、②実践と鍛錬、③比較、④偏見からの自由、⑤良識の5つであり、これらを持ち合わせた真の判断者の間で共通の判断がみられた場合、その判断こそが趣味の標準なのだというのがヒュームの主張である。これは、さまざまに異なる人々の趣味の多様さを認めながらも、趣味に正しさを担保させることを可能にした議論である。本論では、この議論の利点を現代においても適応させるため、18世紀の芸術とは異なる現代芸術の性質やあり方に即した条件を付加する。

現代芸術の性質とは、すなわちその鑑賞を困難にしている原因そのものである。伝統的な芸術とは異なる価値や、既存の芸術を繰り返し覆してきたその歴史から、現代芸術は、作品を見ただけでは理解ができないものへと発展してきた。こうした作品を理解して鑑賞するためには、背景にある歴史的意義を知り、どんな文脈中にある作品かを知る必要が大きいのである。

こうした現代芸術の実相を踏まえた理想的鑑賞の要素として、まずヒュームが挙げた5つの条件を改訂する。「実践と鍛錬」、「比較」、「偏見からの自由」、「繊細さ」、「良識」のうち、後の2つは生得的な能力に依存するためそのままでは適応できない。そこで、他の条件の前提として「繊細さ」を、生得的に誰もがもつ共通感覚として「良識」を捉え直す。それらに加えて、とりわけ現代芸術の正しい理解のために新たに3つの要素「文脈」、「正しいカテゴリーでの知覚経験」、「個別領域に特化した知見」の必要性を提示する。これらの要素はすべて鑑賞者が陶冶していくことのできる能力であり、この能力をより適切な状態へと高めていくことが理想的鑑賞の態度である。

本論で提示した現代の芸術作品に対する理想的鑑賞の態度は、多様な表現を理解し解釈する段階へと、鑑賞者を導く手立てとなるものである。現代芸術が呈する困惑に向き合い、表現を愉しんで作品を鑑賞するためには、作品を理解することが不可欠である。芸術作品を真に理解した鑑賞が可能になって初めて、私たちは現代芸術の意義や価値を論じることができるようになるのである。

[主要参考文献]
参考1)David Hume／“Of the Standard of Taste”／*The Philosophical Works*, Vol.3／1757
参考2)ロバート・ステッカー／『分析美学入門』／勁草書房／2010年
参考3)森功次／「失礼な観賞」／日本美学研究所編『美学文芸誌 エステティーク』Vol.1／2014年
参考4)David Cottington／*Modern Art. A Very Short Introduction*／Oxford University Press／2005
参考5)Jerrold Levinson／“Hume’s Standard of Taste: The Real Problem”／*Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol.60, No.3／2002
参考6)Stephanie Ross／“Humean Critics: Real or Ideal?”／*British Journal of Aesthetics*, Vol.48, No.1／2008
参考7)ケンダル・ウォルトン／「芸術のカテゴリー」／電子出版物／2015年
参考8)Dominic McIver Lopes／“Aesthetic Experts, Guides to Value”／*Journal of Aesthetics and Art Criticism*, Vol.73, No.3／2015